

盲先覚者伝記シリーズ

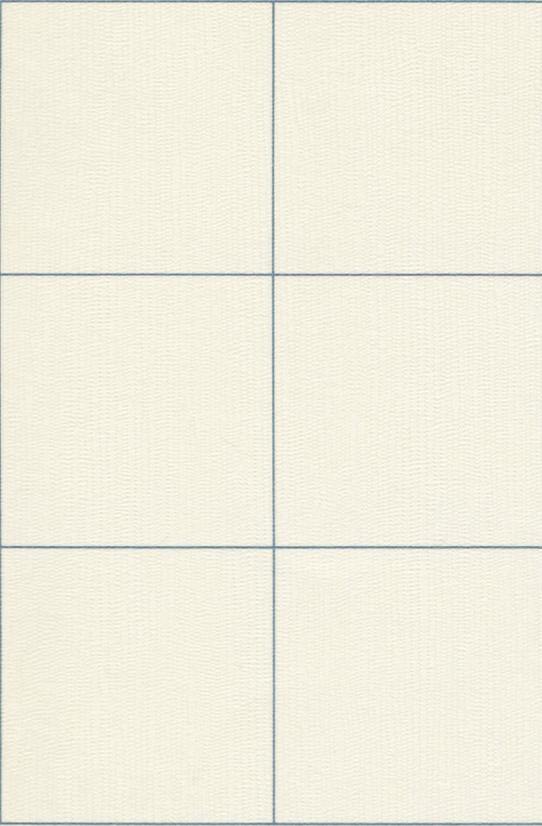
1

IWAHASHI TAKEO

岩橋武夫

義務ゆえの道行

関宏之



佐藤 恵子

高橋 実様

1983. 12. 11.

周知

盲先覚者伝記シリーズ

1

IWAHASHI TAKEO

岩橋武夫

義務ゆえの道行

関宏之



## 推薦のこぼ

日本盲人福祉委員会理事長 実本博次

国連が、1981年を国際障害者年に制定したことにもみられるように、近年、社会の障害者観は大きく変貌しつつあります。特に、文化が深く根をおろした所では、かつてのように、障害者を憐憫の情のみで救済の対象とする風潮は消滅した、といっても過言ではありません。こうした国際的な障害者観の大きな流れの中で、わが国でも障害者の生活は、日一日と社会に統合され、生きがいのある自立したものになりつつあります。

しかし、一時代前に目を転じたとき、今でも民度の低い地域がそうであるように、障害者に対する物心両面からの抑圧は想像に絶するものがありました。視覚障害者だけに限っても、先人が残した心のひずみの記録は、いくらでも数え上げることができます。同じ障害を持ち、悩みを分かちあえる者が、自ら先頭に立って、いばらの道を切り開いていけない限り、同じ運命に悩み、苦しむ者に光を当てることができない時代であったと言えます。

わが国でも、そのように自らの障害を克服した先覚者は、多数輩出しています。視覚障害者の世界でも、古くは塙保己一、杉山和一といった偉人から、現代の盲人文化や盲教育の基礎を築いた先達まで、数え上げれば枚挙にいとまがありません。

しかし、残念なことに、ごく卓越した人物を除いて、その人の偉業と人となりを伝えるものはあまり残されていません。半ば伝説化した中で、その人の業績が風化しつつあるというのが実状のようです。特に、現代の視覚障害者の生活に直結するような業績を残した近代の先覚者に、その感が深いと言われます。じかに訾咳に接した方々の証言を、今集めておかなければ、やがて忘却のかなたに押し流され、先達の偉業を正しく後世に伝えられなくなる、そんな状況にあるように思われます。

こうした折に、日本盲人福祉研究会が、この伝記シリーズを企画し、刊行

することは誠に時宜に適し、大いに意義のあることと思います。こうした地道な仕事を続けておられる同会に対し、深甚なる敬意を表するとともに、視覚障害者の方には、先輩の不屈の闘志とそのさわやかな人生を知っていただくために、また、視覚障害者の諸問題の解決に当たっておられる方には、指針を得るための座右の書として、本書を推薦する次第です。

# 本書の刊行にあたって

日本盲人福祉研究会会長 本 間 一 夫

今日、日本の盲人の福祉や教育は、いわゆる先進国といわれる欧米諸国に比べて、その開きは急速に縮まってきたと言われる。ほとんどが無に等しい、同じアジアの開発途上国に比べれば、まったく別世界である。しかし、そうしたよき時代にめぐり会った私どもの幸せは、決して一朝一夕になったものではない。明治、大正、昭和の三代にわたっての、多くの先輩たちの並ならぬ努力の結果なのである。

その数多い先輩たちの中で、いま仮に、「最も優れた一人を」と言われるならば、私は躊躇なく岩橋武夫を挙げるであろう。その人物において、社会的活動の広さにおいて、また、残された業績においてである。

第1に、岩橋は学者であり、文筆の人であった。文学では、イギリスの失明詩人、ジョン＝ミルトンについてはわが国の権威であった。哲学では、ドイツのヘーゲル研究に深かったと聞く。そして論文、随筆、小説、翻訳など、彼ほど広い多くの著述を残した盲人は、後にも先にもないのである。中でも、若き日の失明のショックから立ち上がり、キリストに救われるまでの過程を描いた自叙伝「光は闇より」の1冊は、昭和初期のベストセラーであったし、いま、これを読む者の心にも、深い感動を与えずにはおかないであろう。

第2に、岩橋の社会事業家、また、社会運動家としての業績は大きい。昭和11年創設した日本ライトハウスは、先駆的、総合的盲人福祉施設として、あまりにも有名であり、令息英行氏によって引き継がれて、ますますその輝きを増している。また、いま日本盲会を二分しているといってよい、日本盲人会連合と日本盲人社会福祉施設協議会は、どちらも彼が創立したもので、すでに幾代目かの責任者にはなっているが、ことあるごとに初代会長の功績は、敬愛をこめて語りつがれているのである。また、この日本盲人福祉研究会の前身とみられる日本盲人大学生会が、昭和26年という早い時点で発足で

きたのは、後輩の指導に深く心を寄せる岩橋の斡旋によるものであったことも、忘れることはできない。

第3に、岩橋は優れた国際人であった。戦後とは違って、海外渡航の困難な時代に、失明の身でありながら、イギリスのエジンバラ大学への留学、アメリカへの長期の講演旅行など、そして、日本に大きな影響を与えたヘレン＝ケラー女史の前後3度の来日は、岩橋と女史の深い友情から生まれたものであった。また、昭和30年、東京で開かれた第1回アジア盲人福祉会議は、国際人として広い視野を持つ彼の提唱によるものだった。外人と向かい合っていて、実に愉快そうに談笑していた彼の、流れるように美しい英会話は、なんとも魅力的なものであった。

大正から昭和にかけて、まだまだ遅れていたそのころの盲人の教育、福祉、職業の世界にあって、関西学院の教壇に立つ岩橋が、どんなに大きな存在であったか！盲人一般、特に盲青年たちの、この上なく輝かしい希望の星であり、励ましの道しるべだったのである。そのことを実感として持っている関係者は、今日まだまだ多いことであろう。

私が初めて岩橋にめぐり会ったのは、昭和8年の3月末、函館の組合教会でその講演を聞いた17歳の時であった。「光は闇より」と題する、その愛と涙の体験談は、私の心を強く揺がせ、この時生涯の方向が決定づけられたともいえるのである。その後、関西学院に入学できた私は、ごく身近にある者の一人として、ずっと引き続いて指導され啓発されたことは、まことに幸せであった。あの関西なまりの、鼻にかかった柔らかな低音は、今も私の耳底にはっきりと残って消えない。選り抜かれたことばで、語り来たり語り去る、といったあの名講演は、広く一般の教育界や宗教界で、あるいは盲人に向かって数多くなされたのであるが、その録音が、いま全然残っていないというのは、返す返すも残念でならない。

岩橋去って、来年はもう30年である。今日までとは言わない、56歳で早々と逝った彼がもう10年健在だったならば、日本の盲人文化は一段と飛躍していたであろうし、また、盲界地図も、別な形のものに塗り替えられていたのかもしれない。惜しまれてならないのである。

前にも述べたように、岩橋の著書は数多く残されている。しかし伝記といえるものは、なぜかこれまで1冊も出ていなかった。今度、その執筆者として最もふさわしい関宏之氏を得て、豊富な資料を十二分に駆使して、本書が世に出ることは、感謝に堪えない。しかも、本会が企画し発行する「岩橋武夫 — 義務ゆえの道行」が伝記シリーズのトップを飾ることになったことも喜ばしい限りである。

昭和58年7月1日記す



## 目 次

はじめに .....	1
第一章 光に起つ .....	2
(一) 序章 .....	2
(二) 邂逅 .....	4
(三) 門出 .....	7
(四) 学窓 .....	12
(五) 胎動 .....	17
(六) 知遇 .....	20
第二章 光は闇より .....	27
(一) 黎明を告げる .....	27
(二) 福音を伝える .....	31
第三章 海なき燈台…ライトハウス	
(一) 書齋を出て .....	36
(二) 実践のとりで .....	38
第四章 戦雲に向う .....	44
(一) 春爛漫 .....	44
(二) 警醒 .....	47
(三) 非常時の信行 .....	53
第五章 愛盲の使徒	
(一) 復興 .....	58
(二) 永遠に .....	63
(三) 燈影（ほかげ） .....	68
おわりに .....	73
参考文献 .....	73



## はじめに

実践の人、「愛盲の使徒」、岩橋武夫先生なくして今日の盲人福祉を語ることはできない。しかし、先生の人となりは、断片的に紹介されているだけで、その生涯を記した書は皆無であった。この機会に、せめて先生の足跡なりとも記そうと取り組んではみたが、すっかり怖じ気づいて、先生を書くことがこわくなってしまった。

「岩橋武夫先生を歴史のとばりの中に消してはならない」という思いを募らせながら執筆した。世の中が騒然とし、混沌とすればするだけ、先生の存在は際立った道標として揺ぎない。

「義務ゆえの道行」と題したのは、盲目を当為という言葉に置き換えて、重かろうがつかろうが、自分の生きるべきを生きられた先生の御生涯に由来する。

昭和58年6月12日

関 宏 之

# 第一章 光に起つ

## (一) 序章

紀州徳川家には、田辺を中心とする安藤家、新宮を中心とする水野家という支封がある。そのおこりは、元和5年、徳川頼宜が、駿河府中から紀州に入封したことに端を発する。この時、頼宜には、遠江掛川の安藤直次、遠江浜松の水野重央という重臣が随伴した。極めて異例の移封を快諾してくれた両家にいたく感動した家康は、両家を大名並に処遇し、封地をあてがった。

安藤家、3万8,000石の家臣、岩橋左膳正勝は、同家の封地で、紀州徳川家への俸禄米の出荷地である、和歌山に近い岩橋村、山田村の代官であった。内外の勢力の干渉をうけ、徳川幕府の長い治世に亀裂が生じた幕末のこととて、紀州藩では藩論が沸騰して脱藩国事におもむく藩士が輩出したり、安藤家家中でも様々な騒動が持ち上るなど、内にも外にも、多事多難なころである。正勝は、黒船が渡来したからと言っては江戸表に出向いたり、長州征代には勘定方として参画し、惨めな敗走を味わったりもした。

大勢は、確実に変わりつつあった。そして、やがて迎えた大政奉還は、武士として禄をはんできた人々に決定的な打撃をもたらした。明治政府の樹立とともに田辺藩が設置され、正勝も主君安藤直祐とともに、和歌山を離れ、田辺に戻ったが、明治4年に廃藩置県が施行され、田辺藩が和歌山県に併合させるに及んで、田辺藩士達は完全に職を失った。藩士の多くがそうであったように、正勝も、新天地を求めて、大阪市南区南久宝寺に新たな居を構えた。

このような、あわただしい時代背景の中で、岩橋乙吉は、正勝の第四子、三男として、元治元年(1864年)に和歌山で生まれた。彼は、二人の兄と同様、十分な教育の機会に恵まれて、明治16年、19歳で大阪府の訓導となった。

このころには政権交替の混乱も鎮まり、矢継ぎ早に出される明治政府の施策も定着し、新生日本は、近代化に向けて始動していた。

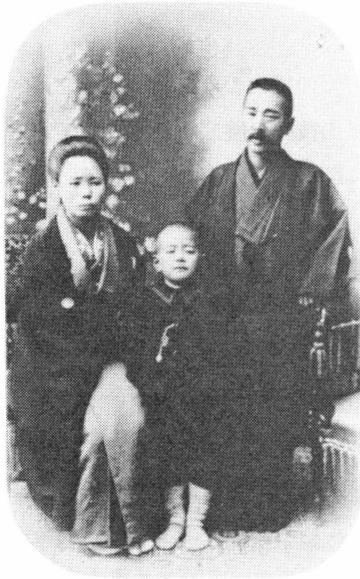
乙吉は、明治21年に訓導を辞し、しばらくの模索の末、明治25年9月、東京の私立工手学校に入学した。同校は、鉱山技師の養成を目的として、工学関係者の発起によって明治21年2月6日に開校されたもので、彼は、ここで、明治27年2月まで、採鉱科、冶金料において、最も先端的な理論と技術を習得した。乙吉に鉱業技術者としての夢を抱かせたのは、田辺藩士で、岩橋家とは親密な関係にあった山本端という人物である。彼もまた大阪に在住していたが、当時、すでに商工省の鉱山関係の官吏で、重工業を中心とした国威高揚政策をとっていた明治政府の方針に乗った、正に時代の寵児であった。

乙吉は、工手学校卒業とともに、三菱社（三菱鉱業の前身）が、明治20年に買収し、翌年に開業した、秋田県鹿角郡の尾去沢鉱山事業部の技師となった。しかし、明治28年には大阪に戻り、山本端の四女ハナと、明治29年3月28日に結婚した。彼女は、いわゆる、典型的な日本人女性で、人情に厚い人だったというが、日常生活に西洋文明を積極的にとり入れたりするハイカラな一面もあった。このころの乙吉は羽振りがよく、馬車を持つほどの身分だった。家運の絶頂期に岩橋家に嫁いだ彼女も、やがて、様々な苦境に遭遇する。しかし、それぞれの局面を果敢に乗り切る豪気な性格も持ち合わせていた。明治31年2月、乙吉は、大阪鉱山監督署の官吏となった。同署は、農商務省が、明治25年3月に、東京、秋田、広島、福岡、札幌、大阪に、鉱山の開発にかかるすべての監督業務を行うために新設した監督署の一つである。

この年の3月16日、乙吉の波乱の人生に、大阪での定住を促すかのように嫡男が授けられた。夫婦は、この子を武夫と命名し、岩橋家の命運をかけた。

乙吉は、さらに転じて、自ら岩橋鉱業相談所を設立し、多数の書生や雇員を抱え、幅広く事業を行い、着実に財をなした。岩橋武夫は、このような環境の中で、健やかに成長していった。

岩橋の人となりを語る上で、祖父、父、母という3人の人格が彼に与えた影響を看過することはできない。岩橋左膳正勝（明治18年没）は、武夫には



幼少時の岩橋武夫、父、母と

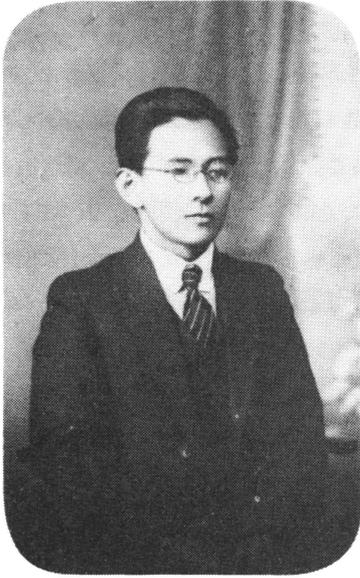
すでに伝説の人となっていたと思われるが、折りに触れて聞かされた祖父正勝は、岩橋家中興の祖であり、明治になってからも、家中の信頼や尊敬を受け続けた人物であった。没落したとはいえ、武士としての高潔さを失わなかった正勝は、武夫にとっては憧憬の人であり、武夫は、成人してからもよく祖父の話をしたという。父乙吉は、激動期の中で冷静に時を読み、時流を先取りした人物である。機を見るに敏なこの父の処世を目のあたりにして武夫は育った。涙もろい母、ハナは、反面、どんな苦境の中でも、底抜けの明るさを失わず、それに耐える

強靱な精神力の持ち主であった。

岩橋は、後に彼が迎えなければならなかった数々の難局を、祖父、父、母を演じ切ることによって克服した。

## (二) 邂逅

武夫は、明治43年3月、大阪市東区南大江尋常小学校を卒業し、4月には大阪府立天王寺中学に入学した。ここで、彼は、野球と絵画のとりこになった。ピッチャーとして、中学のエースであったというし、絵画では、洋画に興味を持ち、とりわけ、タゴールの神秘主義に傾倒した。絵画の勉強に通った天王寺中学校の美術の先生の家で出会った、かれんな少女との淡い初恋に浸ったのもこのころである。父に似て端正な顔立ちの彼は、女学生の憧れの的でもあったという。彼の絵画に関する才能はとび抜けており、それで生計を立てようと考えたこともあったようだが、父の要請を聞き入れ、大正5年



青年時代

に、早稲田大学理工科採鉱冶金科に入学した。

東京には、中学時代の仲間も大挙上京しており、牛込の武夫の下宿には、いくらかの期待と、いくらかの不安が錯綜した、若者らしい生活があった。人に頼まれれば喜んで羽織に花柄を描いたり、友と人生について語らい、夜遅くまで宿題の製図を引くといった、どこにでもある、屈託のない学生生活であった。

彼が20歳になろうとする大正6年の正月、ひどい風邪をひき、かなりの高熱に悩まされた。症状も治り、いざ学生生活に戻ろうとした2月ごろ、目に

変調を覚えた。友人達の勧めで眼科医を訪れた彼に、網膜剥離である旨の診断が下された。入院した武夫を看護するため、梅田女学校（現大手前高校）3年生の妹、静子が急遽上京してきた。武夫の症状は、一進一退のうちにも悪化の一途を辿り、思い悩み、葛藤する日々が続いた。静子もまた、その兄の傍らで、必死に、重い時の流れと戦っていた。大正6年5月、武夫に対して失明の宣告が下された。何とも形容し難い焦燥感の中で、もはや、東京に留まる理由のなくなった武夫は、早稲田大学を退学し、6月には、幼い彼をはぐくんだ大阪の人となった。

空ろな心には、生きるための手だてではなく、無為な毎日が続いた。しかもこの時期、世界恐慌の余波は岩橋家にまで及び、なけなしの財産を預けていた北浜銀行が倒産し、一家の生活基盤すら危うくするという追い打ちまであった。この一連の事態の中で、父は落胆し、静子は梅田女学校を退学し、6歳になったばかりの弟文夫は、兄の代わりをして一家を支えるのだと、健気な決意をする。一家は、上本町の粗末な長屋に引越した。生活は一変した

が、ハナは、こんな中でも、小学校に近いという地の利を活かして文房具店をはじめた。

失明に悲嘆したのは、岩橋やその家族だけではない。不慮の出来事に必ずつきまとう、如何ともしがたい光景である。しかし、人生の途中で失明した彼は、それまで培った経歴や才能をすっかり自分の履歴書からはく奪され、新たなドラマの筋書きすら練り上げることもできなかった。岩橋家では、この突然の襲撃の前になす術もなく、その嵐が通過するまで、ただひたすら我慢するだけの日々が続いた。家族はすさんだ武夫の心に、晴れやかな微笑のかけらでも見出せまいかと、声をひそめ、平静を装いながら彼を見守った。しかし、家族の苦渋に満ちた息づかいは、武夫の気持ちを一層やるせなくした。

大正6年の大晦日、武夫は自分の人生に訣別するため、祖父、正勝が慶応3年に造らせた短刀を手にした。悲しい思いで武夫を見守ってきた母は、「お前に死なれて、この母が生きておれようか。」と絶叫し、短刀を取り上げた。こうして武夫は、黄泉の国から、現世の人になった。母の説く単純な倫理は、難解な哲学的論理や宗教の説く趣きとは異っていた。母は、たとえ無能力者だ、廃疾者だとさげすまれようが、ひたすら、この息子と存在感をともにし、同行者であり続けるのだと説いた。武夫は、与えられた生命を全うすることこそこの母に応えることだと、ただ運命に愚弄されるだけの自分の生き方に終止符を打った。岩橋は、終生盲人に対して同行者であり、執拗なまでに彼等に対して責任をとるという態度を貫いた。まさに母から受け継いだ倫理感を生きた彼であった。

「生きるなら生きるらしくせよ」と決意した武夫が迎えた大正7年の正月は、家族にとっても安堵の門出でもあった。

さて、岩橋は、もし自分が失明していなければ、プロ野球でピッチャーとして活躍する傍ら、シーズン・オフには、カンヴァスを前にして、大地に抱かれながら絵筆をふるっていただろうと語っている。あるいは、そのような人生だったのかもしれない。しかし、この望みはかなえられることはなかった。

失明した岩橋には、筆舌に尽し難い幾多の辛酸があった。終に絵筆を持つ

こともなかった。しかし、母によって現世に連れ戻されて以来、失明を原点とし、そこから生じた葛藤や矛盾をエネルギーとして、極めてバイタリティーに富んだ実践をした。惰眠を貪る人々を揺り動かして覚醒させ、障害者を社会の片隅に打ち棄てておいて平然としている時代に、数々の楔を打ち込んだ。岩橋のこの実践の故に、無告さに泣いていた人々は、正当に人間として扱われるようになった。これは、岩橋が失明したからこそ生まれた事蹟なのである。

「失明は、岩橋にとっては、否、それに連なる者にとっては欠くことのできない賜物であり、うかがい知ることのできない大きな摂理が働いたのだ」とするのは、岩橋に対してあまりにも無遠慮な言い方であろうか。

### (三) 門出

「生きるらしくせよ」と自らを叱咤する岩橋は、大阪市立盲啞院の門を叩いた。同校の前身は、五代五兵衛が、明治33年9月に、大阪市本町四丁目の浄久寺内に仮校舎を設け、細々と授業を始めたものであった。その後、明治40年4月に大阪に移管され、大阪市立盲啞院となった。大阪で市営とされた学校は、大阪高等商業学校と、大阪工業学校のみであったというから、これは、当時の大阪市の大英断と言える。同校は、創立以来、我が国の盲教育の祖として知られ、明治11年に京都盲啞院を開設した古河太四郎が、明治40年まで、院長、校長を務めるという進取の校風を持っていた。

武夫が入学した大正7年には、同校は、大阪市南区桃谷町に移転しており、校長は、かつて同校の校長を務めたことのある宮嶋茂次郎であった。

21歳の武夫は、同年代の囑託教諭、橋本喜四郎と親交を結ぶようになった。彼は同校を卒業後、大正6年から訓盲部鍼按科の教師をしていた。橋本は、先ず点字について教えた。また、点字で書かれた書物や聖書の存在も教えた。彼等は、それぞれの家を訪れては、夜遅くまで話しこんだ。橋本は、ミルトンという盲目の詩人、ヘンリー・フォースセットという今日の郵便制度の生みの親の話、ヘレン・ケラーという三重苦の文化人の話を聞かせた。と

りわけ、武夫の心をひいたのは、ミルトンで、「彼のパラダイス・ロストは、彼が失明したからこそ生まれた傑作なんですよ」と橋本が語ったその言葉であった。橋本は、伝説の人ではなく、現に、それぞれの分野で活躍している盲目の人々について具体的に教えたが、その足跡や実践の中に無限の可能性を知った武夫にとって、橋本との出会いは重要な意味をもっている。

少しずつ開かれていく心に、さらに大きな灯をともしたのは、熊谷鉄太郎であった。彼は、大正7年5月、市立盲啞院に招かれて、全校の生徒を前に講演をした。熊谷は、第一級の英語の達人としてよく知られており、生徒達の憧れの的であったが、特に、失明から生じた数々の試練を乗り切った不倒不屈の人としても尊敬されていた。

熊谷は、天然痘により3歳で失明した。両親に置き去りにされ、西南北海道 of 僻地で、ニシン場の親方をしていた祖父に育てられた。14歳で故郷を後にし、各地で按摩をしながら札幌にたどりつき、ここで盲学校に入学した。盲学校で、さらに上級の学校の存在を知るとともに、キリスト教の感化も受けた。大志を抱いて上京し、明治35年に東京盲啞学校に入学した。ここで彼を刺激したのは、好本督の手になる「真の英国」で、好本は、この本の一章に、「英国の盲人」と題して英国での盲人施策を紹介し、旧態然たる日本の現状を批判的に分析し、その改善を訴えていた。これを機に、熊谷は、好本にならってキリスト教的観点での盲人福祉を考えるようになり、カナダメソジスト教会と深くかかわるようになった。ベーツ (C. J. L. Bates) や、曾木銀次郎といった宣教師達から、信仰とともに、英語、文学、新しい世界観についても学ぶことができた。彼は、明治39年に同校を卒業し、同愛訓盲院、横浜訓盲院、神戸訓盲院で教鞭をとった。明治45年、神戸訓盲院で教えていたころ、中村京太郎が、好本の援助をうけてイギリスに留学するのを神戸港で見送った。イギリスに着いた中村から、熊谷のことを聞いた好本は、次代の日本の盲人福祉を担う人物を育成するという信条から、大正2年、熊谷を、神戸にあった関西学院に入学させた。

当時、我が国で活躍していたメソジスト教会は、アメリカから来たメソジ

スト監督派、南メソジスト教会、カナダから来た、カナダメソジスト教会の三派があった。関西学院は、明治22年、南メソジスト教会のランバス（W. R. Lumbuth）によって、宣教師の養成を目的として創設された。同校の経営に、カナダメソジスト教会が参画したのは明治43年のことで、これを機に東京で宣教を行っていた宣教師が、関西学院で教鞭をとるようになった。カナダメソジスト教会の代表であったベーツも学校経営に参画し、神学部と普通学部（旧制中学）に加え、文科と商科を有する高等学部を付設し、その部長として就任した。曾木銀次郎も、神学部教授、学院の理事となった。熊谷は、ベーツや曾木といった旧知の宣教師に温く見守られ、人生の中で最初に味わった人間らしい平和な日々をこの学院で過したという。

彼が大阪市立盲啞院で講演をした大正7年には、学院を卒業して、大阪市内の市岡で、司牧活動にはいていた。時に熊谷が33歳のことであった。

熊谷の感動的な講演が終るや、岩橋は、丁度この年に同校の囑託教諭となった室井庄四郎によって、熊谷に引き合わされた。この講演を契機として、熊谷は同校で聖書講習会を開くが、岩橋は、妹静子とともに、この会の常連となった。

熊谷は、武夫の中に何かに向かおうとする意欲を知った。彼は、自分と同じように、関西学院で英文学を修めることを勧め、岩橋もこれに賛同した。夏休みを前に、市立盲啞院を退学した岩橋は、外人教師の多い関学での勉学に耐えうるようにという熊谷の配慮に応じて、熊谷の自宅に通い、英会話、英書講読、英文タイプライターの学習にいそしんだ。熊谷の自宅は宝の山であった。英国盲人協会から取り寄せたという点字の聖書や学術書は、武夫の勉学意欲を一層かりたてた。

英書講読には、主として福音書が用いられた。熊谷は、神の思寵の不可思議さについて、ヨハネの福音書をもって説いた。

「ラビ この人の盲目にして生まれしは誰の罪によるものぞ、その人の親のか」イエス答え給う「この人の罪にも親の罪にもあらず、彼の上に神の御業の現われんためなり」 （ヨハネ伝 9章1節－3節）

イエス言い給う「われ審判のためにこの世に来たり。見えぬ人は見え、見ゆる人は盲目とならんためなり。」パリサイ人の中、主イエスとともにありし者、これを聞いて言う、「我も盲目なるか」、イエス言い給う、「もし盲目なりしかば罪なかりしならん、然れども、見ゆという汝等の罪は遺れり」（ヨハネ伝 9章31節—41節）

ヨハネの福音書は武夫に深い感銘を与えた。ハムレットと自嘲的に自らを語った彼は、大正8年の正月、武夫がドンキホーテと称した母とともに、赤沢元造牧師によって受洗した。彼はこの感動に泣いた。母はもとより、列席した多くの人々の頬を感激の涙がつたわった。

岩橋が受洗した場所は、赤沢の任地から推察して、大阪東部教会であろうと思われる。赤沢牧師は、賀川豊彦とも親交を持ち、神の国運動や、セツルメント運動のきっかけとなった大成運動を起したり、ランバス女学校の校長を歴任したのち、メソジストの監督として、日本のキリスト教会の指導的役割を果たした人物である。賀川は、赤沢を評して、「潔めを求めて潔めを受けた人物」と語っている。

岩橋が受洗したこの教会は、第二次世界大戦のさなか羅災し、戦後、大阪市内の旧メソジスト教会と合併し、現在は大阪北梅田教会となっている。

岩橋が日本点字をマスターして、英語点字にも慣れ、少しゆとりのできた大正7年の夏が過ぎたころである。橋本は、岩橋を全く別の世界に誘った。日本橋北詰の法庵寺という真言宗の寺で、その住職、和田達源がスポンサーとなって、国際語エスペラントの講習会が持たれており、二人はこの会に足繁く通うようになった。この会の講師は、幸徳秋水に関係した人々で、高尾亮雄、福田みどり等であった。

エスペラントの提唱者、ザメンホフ・ルドヴィーゴは、リトワニヤ国、ピカリストックという町で生れた。1860年のころ、この町は、ロシア、ドイツという列強の手が延び、ロシア語、ドイツ語、ポーランド語、ユダヤ語、リ

トワニヤ語が氾濫していた。ここで少年時代を過した彼は、多くの外国語をマスターしたが、それぞれ特有の言語があることが国家間の紛争の元凶であると考えようになり、一つの言葉による世界統一という遠大な構想をうち立てた。モスクワ医学校を卒業し、眼科医となった彼は、1887年、「希望者」すなわち、エスペラントという本を出版した。ようやく彼の考えが支持されるようになり、1905年、フランスで、第一回エスペラント大会が開催されるに至った。この大会で、ザメンホフは、「我等は一致して民族の壁を動かす。見よ、壁は揺らぎ、地響をうって倒れる。愛と真が地上を治める日が来た」と演説し、国際語、エスペラントによる世界制覇に強い意志を示した。しかし、現実には紛争は絶えず、小さな紛争がやがて第一次世界大戦を呼び、エスペラントを唱える理想主義者、ザメンホフをあざけ笑うかのように世界を蹂躪した。ザメンホフは各地に赴き、世界平和を唱えて回ったが、その夢は実現されないまま、1917年4月14日、永遠の眠りについた。

我が国にエスペラントが導入されたのは、明治35年のことである。ウラジオストックのエスペラント会会長、ポストニコフが、長谷川二葉亭にエスペラントを教授したことに端を発する。明治39年には日本エスペラント協会も結成され、堺利彦、大杉栄、黒坂勝美、丘浅次郎が参加して、第一回エスペラント大会も開かれた。しかし、その年の大逆事件を機に、この運動も、しばらくの間沈静を余儀なくされた。この運動を再興したのは、中央气象台長、中村精男であった。そして、我が国のエスペラント運動に最も強烈な刺激を与えたのは、「盲目の詩人」エロシェンコである。

エロシェンコ（1890～不詳）は、4歳で失明した。モスクワ盲学校に入学し、15歳の時にエスペラントを学んだ。1912年、万国エスペラント協会を頼ってロンドンに行き、ここで盲目のエスペランティスト、メリック（W. P. Merick）の世話になった。ロンドンで、Royal Normal College and Academy of Music for the Blindに学び、この間、イギリスに亡命していたクロボトキンを訪ねたりもした。エロシェンコは、生来自立心が強く、束縛を嫌って数々の反抗をし、学校から放校処分を受けた。メリックは、盲人が悠悠自適の生活をしているという盲人の天国、日本に行くことを勧めた。

この勧告に従ったエロシェンコは、大正3年7月27日、中村精男を頼って来日し、9月には、東京盲啞学校の研究生となった。その翌年、盲啞学校の有志のためにエスペラントの講習会を開いたが、この中に、明治45年に同校に入学した、若き日の鳥居篤治郎の姿があった。エロシェンコは、大正6年7月に、別天地を求めてシャムに渡ったが、彼は自分の近況を知らせるために、鳥居に点字のエスペラントで度々手紙を書いた。それには、エスペラントの仲間で、大杉栄のかつての恋人であった神近市子に宛てた点字の手紙も同封され、当時、静岡の盲学校で教鞭をとっていた鳥居は、その都度、神近に読んで聞かせた。

この時点では、岩橋と橋本、エロシェンコと鳥居の間に直接の交流はない。しかし、何かを求めようとして懸命に模索していた若き人々は、まるで運命の紐で結ばれていたかのように、エスペラントという斬新な理想主義に傾倒していた。

#### (四) 学窓

洗礼を受けて、すがすがしい門出をした武夫は、熊谷に伴なわれて関西学院を訪れた。熊谷は、ベーツや曾木といった学院の教授達を親しく紹介してくれた。帰り際、ベーツは、「春になったら会いましょう」と、入学を快く承諾してくれた。自由、自立、奉仕を信条としたベーツは、スコットランドの文化的伝統を受け継いだ人物で、とかく弱体であった関西学院に、河上丈太郎、賀川豊彦、坂本勝などの左翼人、文化人を教授として登用するほか、有能な外人宣教師、マッケンジー、アームストロング、ウッドワース、アウトブリッジ等を講師として投入し、学問の府にふさわしい陣容を整え、今日の関西学院大学の基礎を作り上げた。また、「全人類のしもべたるために多くの知識や技能の主人たるべし」という学院のモットー、「Mastery for Service」を提唱した人でもある。

その年の4月、武夫は、関西学院に入学した。当時の学院は、兵庫県菟原郡都賀野村菟原田村字王子菟、および後の宮（現在の、神戸市灘区王子公園

付近)にあった。洋風の学舎は、うっそうと繁る原田の森と六甲山を背景とする山麓にあり、そこからは、淡路島を配した瀬戸内海を行き交う小舟や、海面に映える眩しい陽光を眺望することができた。

この年、英文科に入学したのは、岩橋のほかに、京都の寺院の息子、寿岳文章がいただけだった。文学に対して深い造詣を持ったこの青年は、岩橋の無二の親友となり、正に岩橋の至宝であった。また、二人は、英文学を通じてのよきライバルでもあった。岩橋が入寮した部屋を頻々と訪れ文学談義に花が咲いた。岩橋はミルトンを、寿岳は、ウィリアム・ブレイクを研究したが、岩橋の著作には、寿岳が訳したブレイクの詩が数多く登場する。

さて、岩橋を語る上で触れないではすまされない人物、ミルトン (John Milton, 1608~1694) について簡単に素描しておく。

1534年、ヘンリー 8 世は、イギリス独自の宗教として国教会を作り上げた。これを引き継いだエリザベス I 世の宗教改革も中途半端で、誠実さを求めた新教徒を満足させるものではなかった。急進的な人々は、従来の教会が持つ権威的な側面を排除して、本来的なキリスト教信仰を自分達の手にとり戻そうとした。これが世に言う、ピューリタンである。バイブルを唯一の依りどころとし、神の絶対的な権威や恩恵は、等しくキリスト教徒に降り注ぐと主張した彼等は、教皇、聖職者、教会組織を否定した。そして、労働を重んじ、忍苦、節約といった人格の要素、職業観の平等などを唱えた。

ミルトンは、17世紀の初頭、変革の嵐が吹きすさぶイギリスを離れ、ヨーロッパに遊学していた。ピューリタン達の蜂起を聞いてイギリスに戻り、ピューリタンの立場から国教会を批判し、言論の自由を唱えた。1649年、チャールズ I 世が処刑され、クロムウェルによる共和政府が樹立されるや、ラテン語書記に任用され、国王処刑の正当性などを論じた。彼の立場は官吏ではあったが、その言動は極めて過激な政治的色彩の濃いものである。しかし、この間、過労から視力が衰え、1652年、44歳の時に失明した。クロムウェルが死去し、王政が復古されたが、彼は、不思議にも一命をとりとめた。華やかな生活は一転して悲哀に満ちたものとなったが、その孤独の中で書いたの

が、「失樂園」(Paradise Lost, 1667)である。

人類の祖、アダムとイヴは、天国において誘惑に負けた。失意の二人に神は、墮落した二人の子孫を救うため、キリストを遣わし、その罪をあがなわれるであろうという暗示を与えられた。一抹の不安の中にも、ほのかな希望を持った二人は、淋しくエデンの園を去っていった。

「失樂園」とは、この光景を巧みな表現で記した一大叙事詩である。

彼は、「復樂園」(Paradise Regained)、「闘士サムソンの嘆き」(Samson Agonites)等の著作があるが、65歳で逝去するまで、ピューリタンとして、毅然たる生活信条と、生きざまを貫いた。

盲目の詩聖、ミルトンに傾倒していたころの岩橋について、寿岳は、「黒眼鏡の下でじっと何かを考え、物思いに沈む、沈痛な面持をしていた。それが私をひきつけた」と語っている。なるほど、母によって再び生きることを決意し、受洗して永遠の生命に連なった岩橋だったが、それは、所詮、荒海に弄ばれる船の船倉で、寄港する港や、辿り着く場所すら知らされずに、ただひたすら生きながらえて櫓をこぐだけの奴隷にも似ていた。幾多の試練を経ながら尚も神の名を呼ぶミルトンは、ヨブの生き様にも似て、ただひたすら、神への信頼と忠誠に生きるのみであった。岩橋にとって、ミルトンは英文学の対象としてよりは、むしろ、求道のための道標であった。

さて、シャムにあったエロシェンコは、インドまで赴き、その足跡を各地に残したが、ロシア革命の余波を恐れたインド政府は、ロシア人である彼を国外退去させた。大正8年7月3日、彼は再び日本の人となった。その年の12月、彼は関西への旅を試みた。大阪では高尾亮雄が出迎えたが、12月10日から21日まで、この漂泊の旅人がその翼を休めたのは岩橋家であった。北浜銀行の倒産で憂き目を見た岩橋家も、このころには家運も幾分上向いており、和やかに彼を迎え入れた。金髪の髪、バラライカ、点字本がたくさんはいった袋という、吟遊詩人そのもののいでたちも、岩橋家の人々には何の異和感もなかったようだ。岩橋は彼を評して「並の文学者よりも文学的で、並の思想家よりも思想的である」と語り、エロシェンコは、岩橋について、「自分



西田天香先生と

が今まで会ったどの盲人とも異っている。まるで何かが見えているようだ」と語った。「エロさん」と家族や武夫の恋人から呼ばれ、頼まれればバラライカを奏でてロシア民謡を歌ったりもした。しかし、彼が大阪市立盲啞院で行なった講演は極めて辛辣であった。按摩の徒弟制度のもとで、多くの盲人達が犠牲になっている様子を語り、一部盲人の搾取の上に成り立つこの制度を批判した。メリックが語った盲人の楽園、日本は、あるいは世界で一番悲惨な盲人地獄だと映ったのかもしれない。彼はその講演で、制度の下で喘いでいる盲人達が、一日も早く覚醒するよう奮起を促した。

彼は、12月21日、一燈園を訪れるために京都に向けて発った。

一燈園は、明治39年、西田天香によって創設された「完全無一物と奉仕」を信条とする托鉢集団である。西田は、20歳の時に徴兵を拒み、そのみかえりとして、北海道で開拓生活にはいった。事業は順調に延びたが、ささいなトラブルが原因でこれを手放し、放浪生活にはいった。滋賀県長浜の愛染堂において行をしているとき、この世の中で絶対にゆるぎないものとして、何も持たないこと、すなわち、「完全無一物」の悟りを開き、「懺悔の生活」を著わして同志を募った。京都市左京区鹿ヶ谷で同志とともに道場を開き、そこを修業の場とした。同志達は、原始共産主義にも似た思想と、厳しい規律を守り、求めがあれば、いつでも、どこへでも出かけた。求めのない時には、「路頭」と称して、人々の嫌う場所の清掃や奉仕活動を行った。

エスペラントは、岩橋を、エロシェンコや鳥居に巡り合わせた。そして、西田とも親交を持たせた。こうして、岩橋は未知の世界に向けて旅立つため

に着実な基盤を作り上げていった。また、関西学院は、ベーツや、生涯の友となった寿岳を配して、岩橋を陰に陽に包んだ温い雰囲気も用意した。

失明ののち、何かに向かおうとするまでの歷程については、岩橋が初めてものにした小説、「動きゆく墓場」に詳細に綴られている。失明の失意、悲哀にもがく主人公が盲学校に入学し、やがて天王寺中学時代の初恋の人、「藤子」と再会し、盲目ゆえに彼女との結婚を断念して、彼女に別離を告げるまでが書かれている。この本の随所に、ミルトン、ブレイクの詩が登場し、宗教や哲学的論義が盛り込まれるなど、読み手には大変難解な書でもある。

「藤子」と呼ばれたこの女性については知る由もないが、岩橋が敢然と数々の事業に立向かっている様をじっと見守っていたのであろうか、後に記す、愛娘恵品子の葬儀の日、人々の陰に隠れるように参列していたといわれている。この小説の巻頭言は、彼がイギリスに向かう船の中で書かれているが、学生らしい感傷に満ちたこの小説を面はゆく感じたのか、又は、文章の構成や登場人物について吟味が足りないと感じたのか、彼は、この小説をあまり高く評価していない。のちに、恋人が登場するような文章を全く書いていない岩橋の意外な一面である。巻頭言で、彼は、失明に遭遇した青年が慟哭の中から立ち上った自立の書として読まれることを期待すると、執拗に強調している。

本書の執筆は、武夫が3年生のときに、それまで折に触れてこつこつとしたためていた感想や詩を1冊にまとめたもので、一つの物語とするためには、筆記者であり、かつ、暗い時の流れをともに過した証人、妹静子の手助けを必要とした。兄の影のように武夫に寄り添い、自らの青春を、兄の甦りのために捧げた彼女にも、狂おしいほどの思慕を寄せる人がいた。それは、寿岳文章その人であった。寿岳が寄こす兄への手紙、兄と歓談するその人の横顔、その人が登場するあらゆる場所にと、乙女の瞳は慕う人の姿を求めた。やがて二人は結ばれたが、この時の静子の心の軌跡を描いたのが、彼女の処女作、「朝」である。写實的に進行する舞台の横手で、息を殺し、手に汗をしながら、じっと成り行きを凝視する静子の胸の高鳴りが伝わるようで、過ぎし日の想いと輻輳して、ほのかな緊張感すら与えてくれる。

大正10年、エロシェンコは反国家的言動のかどで日本からも国外追放され

た。武夫にとって、国際的な視野と人道主義について明解な視点を与えてくれた彼の帰国は忍び難かったのであろう、彼は激しい論調でこの理不尽な裁定を下した時の政府や政治家に抗議をしているが、それは、青年らしい社会正義にもとづいた言動にすぎず、このころの岩橋に、具体的な運動論が確立していたわけではない。

## (五) 胎動

大正11年、熊谷が中心となり、高尾亮雄、鳥居篤治郎、橋本喜四郎、小林卯三郎、杉江泰一郎、岩橋武夫等は、「東亜盲人文化協会」を設立した。これは、英国盲人協会を範とする文化的拠点作りを目的としたもので、大阪YMCAが活動の場であった。小林は、奈良盲学校の創立者であり、杉江は、京都盲啞学校卒業後、東洋音楽学校でバイオリンを専攻したが、それで生計をたてることができず、按摩をしながら来たる日に備えていた。

彼等は、同年、全国盲人大会を開催し、大阪中之島公会堂に若き盲人達の集いを持った。今日では、この大会の模様を詳しく知ることはできないが、唯一知られていることは、この大会の席上、鳥居が「エスペラントを学ぶことによって、盲人が世界に目を向けることができる」と、盲人に対してエスペラントの普及を説いたことである。当時、彼等が海外の盲人事情を知り得る唯一の手段は、1904年、ハロル・チランダーが、スウェーデンで創刊した点字エスペラント雑誌「エスペランタ・リギーロ」(Esperanta Ligilo)を読むしかなかった。彼等の活動を支えたスポンサーは、ランバスであったが、彼が亡くなり、財政的基盤を失うなど、この会の存立も危なくなった。

彼等、若き盲人達が、このような活動を興すに至ったのには、それなりの背景があった。大正11年は、我が国の盲人福祉が一時的に、百花繚乱の如く花を開いた年であった。大阪毎日新聞社は、イギリス留学を終えた新進気鋭の盲青年、中村京太郎を主筆として「点字大阪毎日」を刊行した。東本願寺の僧、和田祐意は、失明防止に全力を傾け、仏眼協会を組織して、眼疾者の無料診療を開始した。彼等の行動は、この二つの革命的とも言える出来事に

触発されたものだった。

彼等の具体的な活動の第一弾は、小林と橋本によってなされた。小林は、盲学校に点字教科書がなく、正常な授業ができないことを嘆き、点字教科書の出版を企画して大阪毎日新聞社から3000円の融資をうけた。これには、橋本のほかに、京都市立盲啞院出身の小島謹一（のちに大阪点字毎日に入社）も加わり、大阪市立北市民会館に事務所を設け、国定教科書の製作に着手した。大正11年3月には、修身、国語、算術、理科、国史、地理などの教科書が出版された。この事業は多くの人々から大歓迎されたが、やがて会計係の不正が露呈するに及んで、大阪点字毎日に移管された。第二弾は、鳥居、橋本、小林による、児童向けの点字雑誌「ひかりの園」の発刊である。当時は、児童文学の全盛で、盲児達に少しでも夢を持たせようとして企画されたこの事業も、資金難から長続きしなかった。

第三弾として、岩橋に与えられた使命があった。大正8年、エロシエンコが大阪を経て京都に行ったのを機に、第三高等学校においても、ようやくエスペラント会が結成された。この会員の一人、岡本好次は、新撰エスと辞典を編集した。盲人にとって、エスペラントの持つ意味を十分に熟知していた岩橋は、盲人用のエスペラント辞典を作るために、自宅に、「点字文明協会」を設け、点訳作業に没頭した。この年、大阪市立盲啞学校、岡山県立盲啞学校では、エスペラントの授業が開始されており、次の年、岡山で開かれるエスペラント大会では、彼等が中心となって、盲人分科会を設立することも決まっていた。岩橋は、仲村製点字製版機と手回しのローラー印刷機を駆使して、大正11年の秋に、「点字日エス辞典」を刊行した。父、乙吉も手助けをしたというこの辞典出版事業の開始が、今日の日本ライトハウスの創業の年である。

一連のこれ等の事業のうち、永続的であったのは、財政的基盤のしっかりしていた大阪点字毎日と仏眼協会の事業のみであった。

鳥居、小林、橋本、岩橋といった面々が、一体どのような方法でこの先駆的な事業を行ったかは伺い知ることはできないが、驚異とも思えるこれ等の事業への着手も、本格的に実施され、軌道に乗るためには、なおも40年の歲月

を必要とする。

岩橋は、卒業論文作製のために学舎に戻った。最近、その卒業論文が、寿岳のものとともに、仲良く関西学院大学図書館で発見された。岩橋の「ミルトンのソネット研究」は、毅然とした論旨とは裏はらに、しなやかな文字が配されている。これは、静子が兄に捧げた最後の労作であった。彼女は、寿岳の卒業を待って、ともに京都で新しい生活にはいることになっていた。

関西学院を卒業した岩橋は、母校、大阪市立盲学校に勤めることになっていたが、その足どりは決して軽快ではなかった。ためらい勝ちな心に「さあ」と自らを促しながら歩を進めようとする自分の心情を次のように語っている。盲目者よ。—お前は人生の旅路を何處から来て、何處へ行くのだ。お前はもう憂の洗禮を受けて仕舞った。お前は楽しみの影に、すぐ悲しみを想像するぢゃあないか。お前の美の空想を、直ぐ現実の醜さに連れ戻すぢゃないか。

盲目者よ。—お前は悲しげに歩いて来た。そして何處へ行かうと言ふのだ。もう黄昏が来て居るではないか。あれを御覧。多くの旅人は宿を求めて、あの通り長い安息に入ろうとして居るではないか。お前は、休息を勧めに出て居るあの提灯を持った人々が見えんのか。あれを御覧。フランスの偉人達の名が提灯に書かれて居るではないか。此方には、露西亞の思想家達の名も。彼方には哲人達の名も。お前は詩篇の歌を忘れたのか。

盲目者よ。—私はお前が可愛想になって来た。それではお前、孤獨な胸を震はせながら、此の道の果の闇を訪ね様と言うんだね。

さうしてありの儘に物を見ようと言ふんだね。此の闇には曙の接吻が永遠に来ないかも知れないよ。その時、お前は悶と悲しみと疲勞を、何に依って慰めようとするのだ。

盲目者よ。—お前はお前の生それ自身、お前の涙、お前の小さな芸術に依ってそれを果さうとするのか。

## (六) 知遇

大正12年に、「盲学校及聾哑学校令」が勅令として公布され、盲・聾の教育機関を分離し、それぞれに専門化する措置が講じられた。これを受けて、大阪でも、東成郡生野村大字林寺字長畑（現、大阪市東成区南生野町）に、大阪市立聾学校が開校された。

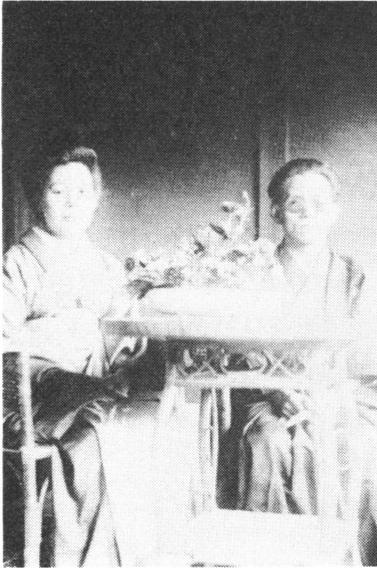
岩橋は、分離がなされた大阪市立盲学校に、英語と国語の教師として就任した。寿岳のもとに嫁いだ静子の代わりに、盲学校への送迎が一燈園に依頼された。派遣されてきたのは、矢野キヲであった。彼女も、岩橋に劣らず波乱の青春を過していた。

キヲは、矢野耕太郎の三女として明治27年5月5日生まれた。父母とも死去するという事態の中で、矢野半治郎のもとに養女としてはいった。広島で女学校を終え、16歳で京都帝大看護学校に入学した。1年間の学科と2年間の実習を経て、ここで看護婦として3年間働いた。しかし、その心が満たされないまま、何かを求めるように上京し、救世軍結核療養所で働いたが、自分も肋膜炎を患い、療養の身となった。病気が治り、鋼管会社の付属病院で1年間働いたが、やはり、満足を得ることができなかった。大正11年ごろ、彼女は、西田天香の著書「懺悔の生活」を読み、自分の求めていた道をそこに見つけるとともに、西田にも会い、一燈園の生活にはいるようになった。京都で修業を終え、神戸に修業の場を移したころに、岩橋家の依頼をうけた。盲学校への送迎や、武夫に本を読んだりする彼女は細やかな心配りをした。良き同行者と巡り合った二人の長い二人三脚が始まった。大正14年2月28日、ささやかな婚礼の宴がもたれた。

一燈園との出会いは、こうして、生涯のよき伴侶を得る機会ともなったが、さらに、武夫の人生を決定づける重要な場ともなった。

神戸に支局を持つ、ジャパン・クロムウエル社の記者、ブレイルスフォード（Brailthford）との出会いがそれである。彼はエスペランティストであり、かつ、クエーカー教徒でもあった。日本に着任する前に、ニューヨーク・タ

イムスで一燈園の紹介記事を読み、興味をもった彼は、日本に着くや、生活体験のために一燈園の訪問を申し出た。彼の来訪に際し、西田は、通訳として岩橋の授助を請うた。これがきっかけとなって、岩橋とブレイルスフォード



結 婚 当 時

は親交を結ぶようになった。親交が深まるにつれて、ブレイルスフォードは、学問にかける岩橋の情熱を知り、スコットランドのエディンバラ大学へ留学することを勧めるようになった。そこには、彼のクエーカー教徒としての親友、地理学教授のチズム博士がいた。ためらう岩橋のために、彼はなけなしの金まで用意した。大阪市、大阪毎日新聞社もこれに賛同を示してくれた。とりわけ、関西学院のベーツ院長は、多額の渡航費を捻出したほか、留学中の彼のために、毎日祈りを捧げた。

岩橋は、大正14年5月4日に生まれた長男を英行と命名し、自分の英国行きを記念した。

大正14年8月6日、夫妻は、生後3ヶ月の英行を他人に託して未知の国へと旅立った。香港に所用のあったブレイルスフォードも、途中まで彼等と同行した。

岩橋の夢を乗せて、船は一路イギリスへと向った。ジブラルタル海峡を経て、もう1週間もすればロンドンに着くという時、岩橋は妻の口をついて出る言葉に暗然とさせられた。イギリスで2年間を過ごすための生活費が、さる篤志家から送金される約束だったが、それが送られなくなったということだった。キヲは、この事実をひた隠しにしていた。武夫の気持がひるまないようにとの配慮からだったが、篤志家を恨んでみたが、ここまで来てしまった以上、妻の大英断の前に黙する他に術はなかった。この時、二人の手許には

800円の現金しかなく、どう工面したところで、長期間イギリスに滞在することは不可能であった。

ともかく、船は、9日22日、ロンドンに着いた。かつて、エロシェンコを



スコットランドに向う船上で

日本に行かせたメリックに温く迎えられ、同家に10日間逗留した。10月1日エディンバラに向けて車中の人となったが、この間、彼は、やがて自分達が迎えなければならない厳しい現実についてブレイルスフォードに手紙を書いた。エディンバラでは、チズム博士をはじめ、クエーカー教徒達が東洋からの珍客を歓迎してくれた。この中に化学教授、ラドラム博士がいた。博士もまた、岩橋にとっては忘れることができない大恩人となる。

下宿は、サウス・クラーク・ストリートに面した4階建の最上階の十畳ほどの部屋で、ベッド、食卓、机、台所

があって、その日から生活ができた。10月9日に簡単な口頭試験があり、講義は13日から始まった。英文学史・グリヤースン博士、一般哲学・ケンプ・スミス博士、宗教哲学・パターソン博士が、1年間の選択科目と教授名である。二人は、空腹の日々を黙って過した。夕食に招待されたりすれば、いそいそと出かけて行ったと岩橋は語っている。

12月を前に、パターソン博士は、宗教哲学のレポート提出を命じた。彼は、キヲが英語のリーディングができないことを知り、学生や、クエーカー教徒に働きかけて、多数のボランティア・グループを募ってくれたりもしていた。岩橋は、「人格神論と神の証明—17世紀からカントに至るまでの神学説の批判論文」を書いた。この論文は思いがけないクリスマスプレゼントを生んだ。3年に一度与えられるスカラシップの対象となり、篤志家が送ってくれるは

ずの金額と、ほぼ同額の奨学金を得ることになった。二人の2年間の生活費を得たわけで、この偶然の恵みに二人は歓喜した。

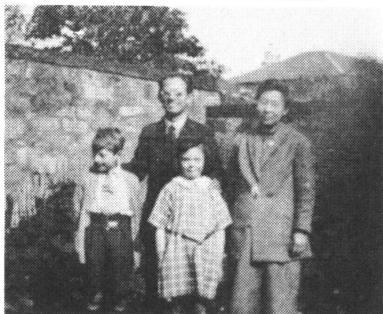
せきを切ったように、二人の前には、多くの人々の無償の善意が注がれた。12月25日、ラDRAM博士は、二人の窮状を知ってか、かご一杯の食料品を届けてくれた。27日には、神戸のブレイルスフォードから、原稿料がはいったからといって、200円の送金があった。

年が明けて、1926年(大正15年)の正月、ラDRAM博士は、厳肅な面持で岩橋に面会を求めた。「私は、あなた方と魂を通じたつき合いをしていなかったようだ。クエーカー教徒は、自らの魂の求めに応じて、実践の中にキリストを求めるものだ。あなたは、自分の窮状を身近にいる私達に語るべきだったし、私達は、それを幾分でも和らげるために何かをすべきだった」と語った。岩橋は、他国の人に自分の恥部を語るつもりはなかったが、彼がエディンバラに向かう車中で書いた手紙を受取ったブレイルスフォードは、アメリカのクエーカー教徒の週刊紙「ユニティー」に、岩橋を救うべきだという記事を投稿した。その週刊紙がロンドンを経て、エディンバラまで届き、ラDRAM博士の言動となった。イタリア、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、ハワイ等から、クエーカー教徒達は、次々と岩橋に送金してくれた。また、当時、日本に帰国していた好本督、キヲのよき相談相手であった早稲田大学中桐教授からの送金もあった。さらに、ラDRAM博士は、自分が移り住もうとしていた家を提供してくれることにもなった。無名の市民の善意もあった。通学する二人が、疲れて眠っていたところ、下宿の前で電車を止め、揺り動かして下車させてくれた市電の運転手もいた。

このように、有名無名の人々が示してくれた善意は、かつて岩橋が味わったことのないものだった。知的に神をとらえ、受洗した岩橋だったが、クエーカー教徒の信仰生活と実践を目のあたりにし、自分の宗教観を一変することになる。

クエーカーは、正式には、フレンド派と呼ばれる清教徒で、祈りの最中に感極まって身体が震えるということから出た呼称である。イギリス人、ジョージ・フォックス(1624~1691)によって提唱されたもので、「神と人とは

直接連っており、相互に交渉を持つことができる」という考えから、他のピューリタニズムと同様、教会、神学者、権力者が神の代弁者として振舞い、神と人間との交渉をさえぎっていると主張した。この言動のため、彼は、教



イギリスでの1コマ

会から弾圧された。教会組織を否定した彼等には、洗礼もなければ、特別な教理や教会堂もなかった。ただ、人間の「内なる光」に忠実に応えるために沈黙の礼拝があるのみだった。同派の理論的指導者、パークレーは、「ただ明瞭に、自分達は神によって啓示され、従って、久遠の本質によって支持されている生き方を発見したのだと信ずることによってのみ実践を押し進めていくことができる」と述べている。ラDRAM博士や、ブレイルスフォードは、この啓示にもとづいて兵役を拒否し、投獄された経験を持っていた。クエーカー教徒であるということは、真剣な祈りを通じ、なすべきことを神と対話

し、全生命を賭して責任ある行動をとるということである。岩橋は、自らの魂の求めに応じてクエーカー教徒となった。

クエーカー教徒岩橋は、かつてないほど平穏な日々を学業に傾けた。6月には、第一学年の授業が終り、哲学、文学の修了証書を手にした。7月には、ラDRAM博士が提供してくれた家に移った。この年、イギリスで、7月31日から8月6日まで、万国エスペラント大会が開催されることになっており、日本からも慶応大学の藤沢や、その同僚の津田など、多くの日本人達が岩橋家を訪れた。彼等は、三越のノリやスルメなど、日本の品々を持参してくれた。エスペラント大会に出席するために、ハンガリーから来た青年達が偶然に岩橋家を訪れ、引越の手伝いをするというハプニングもあった。新しい家

は250坪ほどの広さがあり、庭には、バラやスイトピーの花が咲き乱れ、おまけに、菜園まであって、サラダを作って食卓に供することもできた。岩橋の書斎も確保されて、イギリスで迎えた2回目のクリスマスは、神の恵みに包まれ、至上の幸福に満ちていた。

翌年（1927年、昭和2年）、5月10日に長女が生まれた。ラDRAM博士やバターソン博士は、エディンバラにちなんだ名前をつけるように言い、武夫は、日本的なものにしたいと言い合った。結局、エディンバラの娘、Edinの子、すなわち、恵品子と命名された。恵品子が誕生するというあわただしい最中、大阪市立盲学校校長、宮嶋が岩橋を訪ねた。彼は、文部省から欧米各国へ出張を命じられ、イギリス、スウェーデン、ドイツ、オランダ、ベルギー、フランス、デンマーク、スイス、イタリアで、主要都市における盲教育、盲人福祉の実態を視察研修の途上であった。

5月20日、修士課程のすべての日程を終了し、提出論文の口頭試験が行なわれた。7月1日、待望の修士号授与式があった。エディンバラの市民は、我が事のように喜び、岩橋夫妻の忍耐と努力に惜しみない拍手を送った。マンチェスター・ガーディアン紙、クリスチャン・ワールド紙、フレンド紙の三紙には、数々の辛苦を克服し、今日の日を迎えた夫妻の記事が大々的に報道された。

7月25日、魂の故郷、エディンバラを多くの人びとに対する謝辞とともにあとにし、ロンドンに着いた。ここで、当分の間、盲人福祉について研究する予定であった。彼等の下宿は、リゼンツパークまで3分、英国盲人協会まで5分という地の利を得た閑静な住宅地で、恵品子の散歩にも好都合だった。この下宿に、しばしば好本が訪れ、岩橋を励ましている。岩橋は、「幼子のような信仰を持った心の底から善意の人」と彼を評し、生涯の良き師と仰いだ。ロンドンでは、完備された盲人協会の点字図書館で、15万冊もの点字図書の中から自分の読みたい本を読み、盲人福祉について学び、必要な印刷物については、クエーカー本部でリーディング・サービスを受けた。

彼は、大阪市立盲学校校長、宮嶋に手紙を書き、8、9、10月はロンドンで盲人福祉を研究し、その後、エディンバラかオクスフォードで博士

課程に入学し、それが終了した時点でアメリカを回って帰国すると伝えた。しかし、自らの勉学のためとは言え、故国に置いてきた英行の消息に心を痛め、9月19日、寿岳と盲学校の同僚に宛てた手紙には、勉学を中止して、近々帰国すると書いている。12月16日、メリックをはじめ、親しい人々に見送られて帰国の途についた。

船中で、「真に私なき祈りと、献身的な努力を、同じ兄弟姉妹のために捧げるために、数名の奮起を促し、これらの人々と基礎的団結を計りたい」と鳥居に書き、指導的立場に立てる意欲ある盲人の結集を訴えた。

エディンバラは、彼に決定的な刻印づけをした。闇の中に光を見た者として、そこには、揺るぎない、輝くばかりに純真な岩橋の誕生があった。岩橋の人生のスケジュールは、この時点ですべて策定されたかのような印象すら受ける。このスケジュールに従って、自分の内なる光に忠実であろうとする岩橋は、縦横無尽に日本中を駆け回り、既成の枠の中でぬくぬくとしている人々を驚愕させ、時には、彼等の権威と真っ向から対立して、その権威を失墜させた。岩橋に当為はあっても、何ら恐れるものはなかった。内なる光はもっと激しく岩橋の関与を促しさえもした。

## 第二章 光は闇より

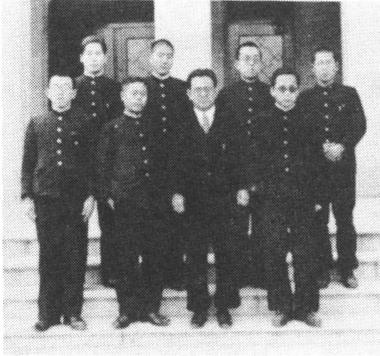
### (一) 黎明を告げる

岩橋は、昭和3年3月に帰国した。彼の就職はかなり難航したが、ベーツ院長や寿岳の計らいで、関西学院専門部で、宗教哲学、英文学を教えることになり、大阪市立盲学校においても、引き続き、英語と国語の教鞭をとった。

和歌山県田辺市在住の楠本定一は、昭和3年4月に英文科に入学し、岩橋の最初の教え子の一人となった。彼は、「岩橋先生は、黒い眼鏡の知的な英国紳士風であった。授業では、自分の知っていることすべてを教えようとされ、わかりやすく教えて下さった。自分が見えないから、君達の方でいろいろ声をかけてくれたり、注意をしてくれ、などとユーモアを交えた授業だった。圧巻はミルトンの講義で、ソネットはほぼそらんじておられたようだった。チャペルの講話には、他の学部の学生も大挙押しかけ、詩的な語り口と説得力のある話し方に魅了されたものだ」と語っている。

関西学院は、翌年、西宮市上ヶ原に移転した。田園と雑木林に囲まれた殺風景な学舎に立った院生達は、風光明媚な神戸の原田の森を懐しがったという。

岩橋の就任とともに、関西学院は意欲ある盲青年達のメッカとなった。昭和4年、日本ライトハウスに永い間勤務し、岩橋の傍らで彼の縁の下の力持ちとして活躍した明田治雄が英文科の聴講生となった。関西学院は、昭和7年に、専門学校から大学に昇格したが、この新生なった学窓に、昭和10年瀬尾真澄が神学部、昭和11年には、下沢仁が神学部、本間一夫が英文科、昭和12年には、高尾正徳が文学部社会科に入学した。彼等は、岩橋はもとより、ベーツ院長、寿岳など、理解ある教授や同僚に恵まれて大学生活を送り、我



盲人学生とともに

々がよく承知しているように、今日の我が国の盲人福祉の礎として、今も現役として尽力されている方々である。

岩橋は再びエスペラントに深いかわりを持ち、日本盲人エスペラント協会を設立し、エスペラントの最盛期を築き上げた。

一方では、クエーカー教徒として、自分の立場を明確にし、実践を行うようになる。

クエーカーの日本への導入は、明治18年12月1日、アメリカ人宣教師、ジョセフ・コサンド夫妻が、フィラデルフィア外国伝道教会から派遣され、日本伝道を行ったことにはじまる。このきっかけを作ったのは新渡戸稲造で、

彼がアメリカ留学中、クエーカー教徒になったことが直接の原因である。彼は、フィラデルフィアで、キリストとの出会いを大切にす敬虔な信仰集団クエーカー教徒にいたく心を動かされ、それに入信するとともに、信者の娘エルキントン嬢と結婚した。我が国では、クエーカーは、「基督友会」と称し、主に東京や水戸で布教活動、学校経営を行っていた。国立特殊教育総合研究所の木塚泰弘の母君は、同会が経営する「普連土女学校」の卒業生であるが、イギリスから帰国したばかりの岩橋の講演を何度も聴かれたという。この他、同会は、医療事業、売春禁止運動、農村事情の改善にも尽力し、関東大震災に際しては、罹災者に住宅を提供したり、乳児のためにミルク・ステーションを設けたりもしている。しかし、同会を最も特徴づけたのは、国際連盟の精神を尊重し、世界平和のために寄与することで、政府に対してもしばしば勧告文を提出したりしたことである。

岩橋は、東京を中心として持たれているクエーカーの会合を、大阪で持つ

た。岩橋を中心とする信仰の輪ができ、「靈交会」と名づけて、彼の自宅や大阪YMCAで定期的に礼拝を行うようになった。

クエーカー教徒として、岩橋が公式の場に立ったのは、期せずして、盲人福祉と関わりのあることだった。我が国では、明治40年に、好本督が組織した盲人会があった。しかし、大きな盛り上りもなく、昭和3年4月、秋葉馬治、川本宇之助といった海外留学の経験を持つ盲教育研究者が推進役となって、日本の中心的な盲人団体、中央盲人福祉協会を設立し、会長には、渋沢栄一子爵、副会長には、大久保利武、新渡戸稲造が就任した。また、この会の理事の一人に、日露戦争によって下火となったクエーカーの活動を盛り立てるために、明治34年2月6日に来日した、ギルバード・ボールスがいた。彼は、基督友会の責任者であり、日語学校校長、国際連盟理事という要職を兼ねていた。なお、同会の会員は、盲教育関係者、眼科医、盲人保護事業家が加入していたが、盲人自身の代表者は加わっていなかった。同会の活動方針には、盲人の保護、失明防止に関する研究のほか、盲人に関する連絡、調査が盛りこまれていた。しかし、際立った活動があったわけではなく、同会が本格的に認知されたのは、昭和4年6月、ルファス・グレイブス・マザー女史を迎え、東京を中心に数回の講演会を持って以来のことである。彼女はアメリカ盲人協会を設立し、その活躍の拠点を、1905年に設立したニューヨーク・ライトハウスに置き、「盲人の幸福を願ひ、盲人の幸福のために働き、盲人の幸福を喜ぶ」という「ライトハウス運動」を提唱し、来日したころには、ライトハウス運動の拠点「ライトハウス」を、パリ、ローマ、ワルシャワ、広東等、世界10か所に建設していた。また、失明防止に関しては、ロックフェラーを名誉会長、ヘレン・ケラーを副会長に、自らはその会長として、世界各地の失明防止運動の頂点に立っていた。

彼女は、日本中央社会事業協会、日本赤十字社篤志看護婦人会、東京盲学校で講演を行うことになっていたが、ギルバード・ボールスは、その通訳として、イギリスから帰国したばかりの岩橋を用いた。

岩橋は、マザー女史と交流が持てることは大きな喜びであった。失明の苦しみから立ち上ろうとして大阪市立盲啞院に入学したころ、ヘンリー・フォ

ーセットの話を聞いていたが、彼は、イギリス留学中に、彼女が書いた「ヘンリー・フォーセット伝」を読んだことがあり、現実には、積極的な盲人福祉運動を推進している彼女には大いなる共感を持っていた。マザーの講演が終了日、岩橋は、新聞記者のインタビューに答えて、「多くの教育者、社会事業家は、マザー夫人の提唱するライトハウス運動に共鳴した。これにより、国民運動を惹起する機運がより一層強まった」と興奮の面持で語った。中央盲人福祉協会は、マザー夫人の勧告に従って、日本においても、大々的にライトハウス運動を推進し、その中央機関としてライトハウスの建設を行うことを決意し、格調高いステートメントを発表した。その運動目標として、

- 盲人にかかわる実態調査の徹底
- 失明防止運動の推進
- 盲人義務教育の推進
- 中等普通高等教育への盲人の受入れ
- 点字図書出版の統一
- 中央盲人図書館の確立
- 盲人問題研究所の開設

が盛り込まれた。このステートメントには、我が国の朝野の名士がこぞってサインをした。

岩橋は、昭和4年4月から12月まで、社会事業研究誌に、「英国に於ける盲人社会立法」と題して、英国の実態をつぶさに報告している。ここで彼の導き出した結論は、先に発表されたステートメントと酷似しているばかりでなく、前年、川本宇之助が「盲教育概観 = 盲学校の理念と本邦盲教育の改善」と題する本で、日本の盲人福祉や教育の向かうべき方向を述べたこととも同じであった。外国を見聞した立場から見れば、日本の幼稚な盲人福祉や教育のあるべき姿は、いかようにでも絵を描くことができた。しかし、岩橋は、この結論を導き出して涼しい顔をしていたわけではなかった。彼は、昭和4年12月、社会事業研究誌において、盲人福祉の基本的なポリシーを提示した。

『社会問題としての盲人』—そは盲人を人間として取り扱い、失明による缺陷をハンディキャップとして社会が負担保護し、以て、国民文化構成の

一員として、その天分を自由に発揮せしめ、人間らしき生活の保証を與へんとする盲人解放、即ち暗より光への運動に外ならぬのである。

これは岩橋の盲人福祉観として、頑固に貫ぬかれる思想で、昭和8年、「愛盲—盲人科学のABC」においても繰返し述べられている。

岩橋が中央盲人福祉協会に対して抱いていた期待は実現されることはなかった。協会は、昭和6年に、我が国で最初の盲人実態調査を行ったり、研究誌を発刊したりはしたが、実際のところ岩橋はうんざりしていた。盲人の実態を調べ、その定義がなされ、バラ色の海外事情を聞かされたとしても、実際に悲惨な事態に直面している盲人の糧にならうはずがないと思ったからである。盲人には、抽象的ではなく、具体的なパンこそ必要だった。彼は、「盲界の革新のイデオロギーは、机上の空論ではなく、血と汗の果敢な実戦あるのみである」と豪語し、ライトハウスの建設に着手しようとしなない協会のやり方を批判した。

しかし、このころ、岩橋の盲人とのかかわりといえ、自分の蔵書を興味ある人々に貸し出したり、自宅で集会を持って、若い盲人達を鼓舞する程度で、自分の手で盲人福祉をやろうとまでは考えていなかったようだ。

## (二) 福音を伝える

全世界のキリスト教会は、昭和3年、エルサレムにおいて、世界的規模でキリスト教伝道政策の再検討を目的として、世界宣教大会を開いた。この大会の決議をうけて、我が国でも世界宣教会々長、ジョン・モットを招き、昭和4年4月に鎌倉において、全日本キリスト教協議会を開催した。そして、賀川豊彦を主導者として、「神の国運動」を展開し、キリストの福音を日本全土に伝えることが決定された。第一期を昭和4年から向こう3年間とし、次いで、2年間で第二期として運動の期限を定めた。この運動に岩橋も用いられることになった。ここでの登用は、彼にとって二つの点で大きな意味を持っていた。一つは、クエーカー教徒として自らの信仰を語り、それを説く

ことであり、今一つは、失明というハンディキャップに対して偏見を持っている国民に自分をさらけ出し、盲人に対する理解と共感を喚起することであった。

「神の国運動」に参画したころは、岩橋の著作の時代であり、文学者という観点からみれば、彼の最も充実した日々であった。

「著作の時代」の幕は、「光は闇より」の刊行によって切って落された。昭和3年、朝日新聞が懸賞小説を募集し、加藤秀雄は、「光は暗から」を書いてこれに応募し当選した。このモチーフは、かつて岩橋が「動きゆく墓場」で登場させた、自分に模した主人公「良一」であった。盲目のゆえにニヒルで、アナキーで、かつ非生産的な人間として、加藤が再登場させた主人公「龍吉」は、当時としては許される限り反政府的で、デカダンな言動で人々に嫌悪感を与える、好ましからぬ人物として描かれている。イギリス留学を終えた岩橋には、「良一」の面影はみじんもなかった。新たな歩みを踏み出した人間として、自分に課せられた使命について記した。これが「光は闇より」である。本書は、昭和9年に彼が米国に行った時、「Light from Darkness」という表題で英文で出版され、昭和21年、昭和27年にも再版されたが、内容は、初版本の時から、1か所の訂正もされていない。本書は、岩橋の信条を適確に示した書だったのか、あるいは自らを律する指南を本書にしたためたのかは知らないが、もう、自分の生き様を変える必要がないほど、究極的な基盤をこの時期に確立したと考えられる。

次いで、昭和6年には、「私の指は何を見たか」を発表した。光を失うことによって、自分が得た人生の光明面について書いたものである。

「兎に角、私の眼は、私の指が動く所、その觸れる所にある。私が杖を以て大地を打つ時、その杖の尖はやがて私の眼の延長となるのである。私の指が觸れる所に、私の主観と客観とが合一して、一つの物語を始めるのである。

指頭の王国—これは私の精神界、思想界、その他一切の内的生活を開く秘密の鍵であった。実に私の二つの眼を盲にした運命は、十箇の眼を指の上<sup>めい</sup>に開いてくれたのである。」

昭和7年には、若き日、彼を幽玄の世界に誘ったタゴールの詩に多くの題材をとった「暗室の王者」を発表した。

「我等の心には落日の美を荘嚴と感じ、天地の偉大を荘嚴と感ずる荘嚴の荘嚴がある。なるほど天地は実に荘嚴な粧ひをしてゐる。然しそれを美と感じ、荘嚴の世界よと感ずる我らの心はより荘嚴ではないか。薔薇の花は美しい。然しこれを美しいと見得る我らの心は、より美しいではないか。豚の前に真珠を投げ与ふる勿れとイエスは言った。真珠を真珠として感ずる我らの心は真珠以上に尊くはないか。この意味に於て、我らは我らの内に実に高く尊いものが蔵されてゐることを確信すべきである。これは、人生一切に對する考え方の基本である。」

「我らには美がない。我らには真の愛がない。これを得るためには、我らは先ずおのれの閉ざした戸を開くべきである。タゴールは、『暗室の王者』といふ一書を著してゐるが、意味深いものがある。心の奥に閉ざされてゐる暗室こそ、我らの発見すべき真の世界であり、我らはその世界の王者としてキリストを迎へねばならない。然るに、我らはこの暗室に鍵をかけてゐる。」

この年には、「星とパン」「愛盲—盲人科学のABC」、クエーカー教徒の教書というべき、ホスド・H・ブリントンの訳本、「創造的礼拝」を発表した。

昭和8年、英文学者として、岩橋の名声を今日に伝える、「失樂園の詩的形而上學」を出版した。

その巻末は、次の文章で飾られている。

「實に肅然として襟を正さしむものは、偉大な天命と天意との前になされた絶対的な自己否定である。ミルトンの信仰もかうして彼の一生を運命の祭壇に、悲劇の犠牲いけにえとして捧げたのであったが、この悲劇の中にこそ祝福と勝利の讃歌が見出されたのである。

(ああ聖霊よ來りて) 我が暗きを輝かし我が低きを高め、これを支へよ。

そは、偉大なる物語の高きに適ふべく 我れ永遠の摂理を證言し 神の道人を直くせんがためなり。(失樂園、第一卷、22行-26行)

勿論ミルトンも人の子なるが故に、缺點もあり、過誤もあり、失敗もあったであろう。併し今、ここに問はんとしてゐるものは、人間としての全ミルトンである。この故に私は彼のため、その暗黒と絶望に充ちた人生の途上に、尋ね當てたる痛ましき荆冠を、悲哀の谷間より、涕にも涸れて咲き出でし、幾つかの花を手折り來って飾りつつ、同じ運命の我が闇に『信仰の悲劇とその勝利』を想起して本文を終るであろう。

『されば兄弟よ、われ神のもろもろの慈悲によりて汝らに勸む、己が身を神の悦びたまふ潔き活ける供物として献げよ、これ靈の祭なり』

ロマ書 第12章 1節」

これに引き続き、「女性に與ふ一母、妹、妻」を書き、彼を彼たらしめた三人の女性に心からの敬意を払った。その冒頭は、次の美しい文章で始まる。「秋の空は晴れて高く、私の窓邊にも百舌鳥のきしり声が聞える。この清らかな自然の前に人間と人間の歴史とは、餘りにも多くの懺悔を持ちすぎている。ナザレの村にもあったこの秋を、近世の村落や都会の暗い貧民窟へ連れて行って見ると、私の心には悲しみが湧く。秋の鳥は歌ひ、秋の花は咲いてゐるが、これを聴き、これを見る人の心は如何。あゝ眞實に澄み切った心の秋、その青い空、和やかな鳥の歌、愛の花を心の野邊に探ね得る女性は幾何ぞ。その人こそ昔も今も未来かけて幸ひである。」

昭和9年、イギリスの文豪、ディケンズ (Charles Dickens) が出版を目的とせず、愛児のためにと書き記しておいた、イエス・キリストの受難者としての生涯(The Life of Our Lord)を「主イエス様の御生涯」と題して翻訳出版した。これは、ディケンズがそうしたように、彼はその訳文を英行に聞かせ、英行の意見を尊重しながら一冊の本としてまとめた。後に語る、昭和9年のアメリカ訪問の2、3日前に完成したというこの本の巻頭で、「一体、軍艦と大砲と飛行機だけで日本帝国が立派な国になれるというのであろうか。

日本が外敵と考えているものよりも、もっと恐ろしい敵は、日本の中にある」と述べ、「自分の今回のアメリカ行きは、キリストの教へを説くためと、他方に於ては、日米両国間に親密な平和を樹立することである。私は言ひたい、愛する日本の少年少女達よ、明日の大日本を真に強く、真に正しく、真に立派に築き上げるため、最も大切な導きをこの書物の中に見出して欲しい。そう念じつつ、私は太平洋を渡るであらう。さやうなら、いつも健康で、朗らかで、神様の祝福があらんことを祈って」と結んでいる。硬い文語調の文章が多い彼の著作の中であって、少年少女に優しく語りかけたこの本は、大人にも感動を与えたのであろう。立派な装丁で、美しい宗教画がふんだんに盛り込まれたこの本を、筆者はつい最近、古本屋で入手した。そこには、いたる所に「心の真実を見た」と、赤鉛筆で書かれていた。

これ以後の岩橋には、まとまった形での著書はない。昭和19年の「石垣の歌」、社会事業研究誌に発表された論文、ヘレン・ケラーに関する数々の著作や訳本はあるものの、それらは、この時期に書かれた緊張的で文語的な趣きとは全く異なり、散文的で、気楽に綴られているかのような印象すらうける。

岩橋には未発表の小説や随筆が数多く残されており、関西学院で用いていた点字講義録等も保存されている。いつの日か、これらをまとめて世に問うこともあろうかと思う。

さて、この時期の岩橋は、自らの信ずるところを、「神の国運動」で発露し、真摯な態度で臨んだ英文学者としての立場を出版物によって世に問うた。そして、書齋で研究に没頭し、神の国運動の先鋒として扇動的に振舞うというスケジュールを完全に消化し、次の目標に焦点を当てて、福音を伝える者から、福音を実践する者へと変身する。

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みにになりたい場合には  
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター  
までお問い合わせください。

## おわりに

年代を追うだけで精一杯だった。岩橋先生と、同時代を同行者として歩まれた方々からすれば、私の戯言など、取るに足らないことに違いない。

筆者は、先生の足跡を辿りながら、生を与えられた者として、生きる気迫と人間が人間に対する優しさについて学んだ。良き先達に連なったことは大きな誇りである。

我等の原点、岩橋武夫先生について、その掘り起しをさせて下さった日本盲人福祉研究会に心から御礼を申し上げたい。

多くの方々にお世話になった。そして、より、多くの資料に助けられた。これらの資料を、そっと残しておいて下さった先輩に感謝の気持で一杯である。

## 参考文献

1. 千葉一正 「明治以降のあんま・はり・きゅう師以外の職業」、日本ライトハウス編「世界盲人百科事典」Pp. 690～695 日本ライトハウス、昭47。
2. 中央盲人福祉協会 「失明者に関する統計 昭和6年12月1日調査」、中央盲人福祉協会、昭7。
3. 中央盲人福祉協会 「中央盲人福祉協会会誌」、第1巻・2巻・5巻・7巻・8巻・11巻・12巻、中央盲人福祉協会、昭9～14。
4. 中央盲人福祉協会 「日本盲人福祉年鑑」、中央盲人福祉協会、昭16。
5. 土井利家 「岩橋武夫小伝」原稿、昭50。
6. 平川正壽 「基督友会50年史」、基督友会日本年会、昭12。
7. 本間一夫 「日本盲人図書館開設1周年」、本間一夫、昭16。
8. 本間一夫 「指と耳で読む」、岩波書店、昭55。
9. 生江孝之 「日本基督教社会事業史」、教文館出版部、昭6。
10. 今田恵 「曾木先生を偲ぶ」、関西学院母校通信No.19、昭33。

11. 今駒泰成 「盲人の父 好本督の信仰と生涯」、好本督「主はわが光」Pp. 160～220、日本基督教団出版局、昭56。
12. 石松量蔵 「盲人とキリスト教の歩み」、日本盲人キリスト教伝道協議会、昭34。
13. 岩橋武夫 「ミルトンのソネット研究」、岩橋武夫大正12年度関西学院卒業論文。
14. 岩橋武夫 「動きゆく墓場」、警醒社、昭1。
15. 岩橋武夫 「英国における盲人社会立法」、社会事業研究、Vol. 4—12、大阪社会事業連盟、昭4。
16. 岩橋武夫 「社会問題としての盲人」盲教育Vol. 2、帝国教育会、昭4。
17. 岩橋武夫 「光は闇より」、日曜世界社、昭5。
18. 岩橋武夫 同上英文版「Light from Darkness」、C. Winston Company, Chicago, 1934。
19. 岩橋武夫 「私の指は何を見たか」、日曜世界社、昭6。
20. 岩橋武夫 「暗室の王者」、主婦之友社、昭7。
21. 岩橋武夫 「愛盲—盲人科学のABC」、日曜世界社、昭7。
22. 岩橋武夫 「女性に与ふ一母・妹・妻」、キリスト教思想叢書刊行会、昭8。
23. 岩橋武夫 「愛盲事業としてのライトハウス」社会事業研究Vol. 22、大阪社会事業連盟、昭9。
24. 岩橋武夫 「主イエス様の御生涯」、三省堂、昭9。
25. 岩橋武夫 「米国より帰て」、基督友会機関誌「友」Vol. 2、友社、昭10。
26. 岩橋武夫 「人及び社会事業家としてのヘレン・ケラー博士」、社会事業研究、昭13。
27. 岩橋武夫 「非常時即常時下の信行」、社会事業研究Vol. 25 No.11、社会事業研究、昭12。
28. 岩橋武夫 「失明軍人とその社会問題」、社会事業研究Vol. 26、社会事業研究、昭13。
29. 岩橋武夫 「ヘレン・ケラー・アルバム」、主婦之友社、昭23。
30. 岩橋武夫 「ヘレン・ケラーと青い鳥」、主婦之友社、昭23。
31. 岩橋武夫 「米国に於ける盲人の社会的地位と其教育」、盲教育概論No.11、日教組特殊学校盲部、昭25。
32. 岩橋きお 「菊と薊と灯台」、日本ライトハウス、昭44。
33. 岩橋英行 「英国の好本先生を尋ねて」、会議報告書「第3回世界盲人福祉会議」

- Pp. 265 ~ 274、日本ライトハウス、昭41。
34. 岩橋英行 「好本先生を訪ねて」、会議報告書「世界盲人福祉協議会実行委員会」  
Pp. 68 ~ 73、日本ライトハウス、昭43。
  35. 岩橋英行 「青い鳥のうた—ヘレン・ケラーと日本」、日本放送出版協会、昭55。
  36. 寿岳文章 「ウイリアム・ブレイクの『ジェルーサレム』研究」、寿岳文章、大  
正12年度関西学院卒業論文
  37. 寿岳しづ 「朝」、岩波書店、昭2。
  38. 賀川豊彦 「イエスの友会、第13回夏期修養会について」、雲の柱Vol. 14、7、  
昭10。
  39. 川本宇之介 「盲教育概観—盲教育の理想と本邦盲教育の改善」、盲人信楽会、  
昭3。
  40. 加藤秀雄 「光は暗から」、朝日新聞社、昭3。
  41. 小林卯三郎 「点字出版史」、日本ライトハウス編「世界盲人百科事典」Pp. 80  
~ 89、昭47。
  42. 小室篤治「ヘレン・ケラー」、新生堂、昭9。
  43. 近藤正秋 「試練を越えて」、愛盲報恩会、昭49。
  44. 厚生省社会局 「社会局50年」、厚生省社会局、昭45。
  45. 厚生省社会局更生課 「体の不自由な人びとの福祉」、全国社会福祉協議会、昭  
55。
  46. 熊谷鉄太郎 「薄明の記憶」、平凡社、昭35。
  47. 関西学院 「大学とは何か—世界の大学・日本の大学、関西学院」、関西学院、  
昭50。
  48. 関西学院 「寿岳文章—研究生生活と関西学院を語る」、関西学院通信「クレセン  
ト」Vol. 4. 1、Pp. 120 ~ 131、昭55。
  49. 関西学院同窓会 「会員名簿=昭和38年度版」、関西学院同窓会、昭39。
  50. 楠本定一 「田辺藩が生んだ愛盲の使徒—岩橋武夫氏の事ども」、紀伊民報、昭  
55. 8. 30。
  51. Lash, J. P. 「Helen and Teacher」、A Mexloyd Lawrence Book, Dela-  
corte Press/Seymour Lawrence, 1 Dag Hammarskjold Plaza, N. Y.,  
1980。
  52. ライトハウス 「紀元2600年奉祝 全国盲人大会報告」、ライトハウス、昭15。

53. 毎日新聞社 「毎日新聞70年史」、毎日新聞社、昭27。
54. 宮沢栄晴 「明治以後の盲人傑出伝」、宮沢栄晴、昭31。
55. 日本ライトハウス 「日本ライトハウス40年史」、日本ライトハウス、昭37。
56. 日本ライトハウス 「日本ライトハウス年報」、日本ライトハウス、昭10—55。
57. 日本盲人会連合 「日盲連第一回大会報告書」、日本盲人会連合、昭23。
58. ノルマン, W. H. H. 「関西学院を支えた愛の歴史—カナダ合同教会と関西学院」  
関西学院通信「クレセント」Vol. 4. 1、Pp. 132 ~ 137、昭55。
59. 大阪盲人福祉協会 「大阪盲人福祉協会30年史」、大阪盲人福祉協会、昭37。
60. 大阪市立盲学校 「大阪市立盲学校60年史」、大阪市立盲学校60年史編集委員会、  
昭35。
61. 大阪市立盲学校 「大阪市立盲学校70年史」、大阪市立盲学校70年史編集委員会、  
昭45。
62. 鮫島盛隆 「赤沢元造伝」、赤沢元造伝刊行会、新教出版社、昭49。
63. 世界盲人福祉協議会日本委員会 「アジア盲人福祉会議議事録」、世界盲人福祉  
協議会日本委員会、昭33。
64. 関宏之編 「愛盲の使徒 岩橋武夫」、日本ライトハウス・大阪盲人福祉協会、  
昭54。
65. 関宏之 「中途視覚障害者の社会参加—リハビリテーションの現場から」、相川  
書房、昭57。
66. 社会福祉研究所 「占領期における社会福祉資料に関する研究報告書」、社会福  
祉研究所、昭53。
67. 袖井林二郎 「マッカーサーの2000日」、中央公論社、昭49。
68. 砂川万里 「日本の代表的キリスト者—新渡戸稲造」、東海大学出版会、昭57。
69. 鈴木力二 「中村京太郎伝」、中村京太郎伝刊行会、昭44。
70. 田所茂昌 「岩橋教授夫妻と米国逢話」紀伊民報、昭11。
71. 高杉一郎 「盲目の詩人 エロシェンコ」新潮社、昭31。
72. 田辺刊行会編 「田辺—ふるさと再見」あおい書店、昭55。
73. 田代三千穂 「概観 イギリス文学史」南雲堂、昭52。
74. 燈影女学院 「燈影女学院入学のしおり」燈影女学院、昭11。
75. 燈影女学院 「作文集」、燈影女学院、昭13。
76. 燈影女学院 「燈影学報」Vol. No. 1、燈影女学院、昭14。

77. 鳥居篤治郎 「エスペラント」、日本ライトハウス編「世界盲人百科事典」<sup>p</sup>p. 153～154、日本ライトハウス、昭47。
78. 上沢謙二 「十人の新偉人伝」、羽田出版、昭25。
79. ヴァイニング・E・G 「日本での4ケ年」=高橋たね訳=、文藝春秋新社、昭26。
80. 山本有三 「無事の人」、新潮社、昭24。
81. 吉田久一 「昭和社会事業史」、ミネルヴァ書房、昭54。
82. 好本督 「十字架を盾として」、日曜世界社、昭9。

上記の図書に加え、岩橋家所蔵の古文書や紀州徳川家、安藤家の歴代の当主に関する資料、日本ライトハウス所蔵の昭和4年から今日に至るまでの新聞記事スクラップ・ブック等の資料を参照したが、参考文献としては登録していない。

写真は、岩橋家所蔵のもの、日本ライトハウスに残されているものをもとに編集された「日本ライトハウス40年史」、「愛盲の使徒 岩橋武夫」より抽出し、コピーしたものである。

盲先覚者伝記シリーズ No.1

岩 橋 武 夫

— 義務ゆえの道行 —

1983年9月1日発行

定 価 800 円 (送料 200 円)

著 者 関 宏 之

発行者 本 間 一 夫

発行所 日 本 盲 人 福 祉 研 究 会

〒160 東京都新宿区高田馬場

日本点字図書館内 1-23-4

電話 03 (200) 1130

振替口座 東京 6-16103

印刷・製本 東京  
墨田 合同印刷株式会社

〒130 東京都墨田区業平

2-9-13

電話 03 (624) 6111




日本盲人福祉研究会

定価800円